環境事始　二十二帖　蔡子珉大人のこと

～外交の重要事項を忘れていた～

加藤 龍夫著

どう云う経緯か記憶にないが台湾から大学の先生が一年留学で来たことがあった。半休先生より少し年配だった。長年教師を勤め上げてその功労に対し官費留学を許されたわけである。委細心得て、日本中旅行ができるよう考えて、湖の水質調査をテーマに選んだ。通常の水質調査は無機イオンと揮発性有機物であって後者が環境汚染に関係する。蔡先生は近頃流行のメタボ親爺と異なりきびきびしたスポーツマンタイプの竹を割ったような性格の仁であった。研究旅行は北海道から九州まで、先生と同行したことも学生たちと連れ立ったこともあった。逸話を述べよう。南九州は韓国岳に登り大浪池から池田湖、鰻湖と廻り海岸の温泉に泊まった時、さて新鮮な魚は美味しいよとご馳走を並べたところ、箸を付けない。この辺は水俣と海が繋がっているから恐ろしくて食えないと言い張る。離れているから関係ないといくら説明しても遂に食べなかった。少々頑迷であるが、水俣病が海外に如何に衝撃ニュースとして伝えられているか考えさせられたことであった。学生たちと関東のどこか車で走っていた時、信号待ちで桜井の看板を見た。大人曰く「あっ、ここはあの桜井の駅の桜井ではないか」。花井たち「えっ？・・・・」、何のことやら分からない。分からないはずである。桜井とは楠正成がわが子正行に湊川の決戦を前にお前は生き延びて忠義を尽くせと諭した、小学唱歌の名場面なのである。大人は戦前日本人としての教育を受けていて戦後世代の花井たち民主主義教育で育った連中より余程日本人的なのであった。だから世界情勢は変っても大人には祖国の山河を観光する気持ちがあったろうと思う。先生はそれを汲み取って案内するよう努めたのは言うまでもない。大人が国へ帰って台湾一週旅行に招待してくれた。楽しかった旅のその印象を幾つか。台湾は原住民の高砂族がいて、蔡さんたち明から逃れて来た中国人とその上に蒋介石と共に来た本省人の三重構造となっていた。南端から東海岸の出ると高砂族の人たちの世界が残っている。以下三つ紹介すると、峠のバスセンターで、「あ、忘れ物した、取って来る」とおかみさんが飛び出した。ふと思う、はてここは日本ではないのだ。タロコの名勝で土産店の娘さん、あまり日本語が流暢なのでどこで勉強したかと尋ねたら家で両親が毎日喋っていると。有里山の三重ループの鉄道に乗ったら、今年定年になった親爺が話し掛けた。生涯一番の手柄話が明治神宮の鳥居用の巨大杉材を運んだ時、カーブがきつくて苦心したと。「東京には見に行きましたか」、「いや、それきりでした」と。敗戦の混乱時は仕方ないとして、復興後これら元日本人を手助けする方法はなかったのか。今さら外務省担当者の情けなさをつくずく感じた。環境問題にしても外国と仲良くし、手助けしなければ解決は難しいと思うが。蔡大人は後日交通事故に遭って亡くなったと知らせがあった。何ということだ、折角繋がった台湾との交流は残念にも途絶えた。無常迅速起こるはずのないことが起こるとは、痛

恨の極みであった。なおこの時点で日本の湖沼は二、三を除いて全てトリハロメタンの汚染を認めたのであった。その後になるが殆んどやけくそで屋久島の河川水、奥尻島の降雪を調査して極微量の汚染を検出した。世界中水も空気も繋がっているとは言え、何ともやり切れない気持ちがした。